

『平家物語』と『太平記』のことば（四）

——「厄」と「出家」——

池 田 敬 子

一

筆者は既に「『平家物語』と『太平記』のことば」を題名に含む論考を三篇発表している。

①『平家物語』と『太平記』のことば

『國語と國文学』第85巻第11号 二〇〇八・一一
両作品の文学性の相違に結びつく可能性のある「悪行」と「ゆゆし」について語義の相違を検討。『太平記』は、『平家物語』の表現を確実に意識していたこと、これらの語義の範囲に明らかな差違が認められることを示した。

②『平家物語』と『太平記』のことば（二）

——形容詞「あさまし」の語義

『文藝論叢』 第七八号 二〇一二・三

形容詞「あさまし」の使用頻度と語義の調査・考察。
『平家物語』では、清盛の悪行の道程と呼応するように巻四・五での使用頻度が高く、かつ強い否定的評価を表す重要な語であることを確認。『太平記』では、全巻にわたり使用頻度が非常に高く作者の評価・判断を顕著に表す語で、『太平記』を代表する形容詞と結論した。また『太平記』は、現代語に通じる新たな意味領域を開いていることも指摘した。

③形容詞「うたてし」の語義

——『平家物語』と『太平記』のことば（三）——

『軍記物語の窓』第四集 関西軍記物語研究会編

和泉書院 二〇一二・一二

「あさまし」の類義語「うたてし」について、両作品の全用例を検討し、主知的な「あさまし」と異なり、やや主情的に嫌悪・拒否・非難を表すと結論した。また、『太平記』には、「あさまし」の主情的使用が見え始めることを指摘、「うたてし」の両作品における使用頻度の相違の理由に及んだ。

これらの論がどのような問題意識に基づくかについて、①論文で次のように述べた。

『平家物語』と『太平記』の両作品を読んでの率直な第一印象の違いの強さは、何に由来するのであろうか。……略……漢語であれ和語であれ、他のジャンルにおいても（共時的に）使用されあるいは通時的に使用される、決して特異ではない語に関して、両作品における使用の様相には何らかの特徴的相違点がある、つまり語の用法・語義範囲の相違があつて、それが印象の違いを生み出しているのではないか……略……それが、ひいては『平家物語』と『太平記』の文学性の相違といふところまで踏み込めるか否かは、全く未知数である⁽¹⁾。

この問題意識は現在も同様に筆者の中にある。本稿では僅かなりとも「文学性の相違」に近づく可能性のある

仏教関連の語に焦点を合わせる。所謂「仏教語」（辞書において「仏語」表示のあるもの）のみならず、それに関連する語も対象とするので「仏教関連の語」とした。これらは現代の感覚では「決して特異ではない語」とは言えないであろうが、中世にあってはすべての文学ジャンルに多出する語であり、おそらくは古代・近世も含め古典文学作品においてはこれらの見られない作品の方が少ないと思われるからである。しかし、『平家物語』も『太平記』も多くの「仏教関連の語」を使用しながら、「宗教性」という点では『平家物語』が『太平記』を圧倒しているといえよう。たとえば「仏教文学」というジャンルに『平家物語』を含めることは誰しも当然と考えようが、『太平記』に関してはそうではあるまい。その理由に一言なりとも言及できることを期待して考察を進めたい。

作業手順は、次の通りである。

索引を使用して「仏教語及び仏教関連語」を拾い上げ、見出し語の数量（異なり語数）比較、各語の使用回数（使用頻度）比較を行い、問題になりそうな語を作品本文の文脈に返して検討。語の査収の範囲は広く取ったが、「出家す」に該当する和語表現

「様をかう」などの「語句」は含まない。なお、索引からの語の検出には、大谷大学非常勤講師安藤秀幸氏・同歴史学科任期制助教長谷川雄高氏の助力を仰いだ。⁽²⁾

使用索引および作品本文のテキストは以下の通りである。

『平家物語総索引』 金田一春彦・清水功・近藤政美編 学習研究社 昭和四八年

日本古典文学大系『平家物語』（龍谷大学蔵覚一本）に基いて作成されたもの。

『土井本 太平記 本文及び語彙索引』 西端幸雄・志甫由紀恵編 勉誠社 一九九七年

土井忠生氏蔵仮名書き本（古活字本等の流布本の一種か）に基いて作成されたもの。

『平家物語』 日本古典文学大系『平家物語』（龍谷大学蔵覚一本）

龍大本に欠けている「祇王」「小宰相」は高野本によって補われている。

『太平記』 日本古典文学大系『太平記』（慶長八年刊古活字本）

引用は、漢字平仮名交じり表記にあらため、漢文

表記は訓み下す。

なお、本文の引用に際して、送りがな等については私にあらためたところがある。

二

さて、索引によって選出された「仏教関連語」は、概数であるが『平家物語』が一〇〇語余り、『太平記』が一四〇〇語余りであった。両作品とも異なり語数としては非常に多くの語を使用していると言える。しかし、使用頻度となると両作品とも各一例・二例という頻度の低い語が非常に多く見られ、かつ両作品におけるばらつきも見られる。一例として「仏（ぶつ）」を挙げてみる。数字は、『平家物語』／『太平記』である。

仏 5 / 0	仏意 0 / 2	仏因 1 / 0
仏閣 2 / 21	仏供 0 / 1	仏具 0 / 3
仏果 0 / 2	仏家 0 / 1	仏教 1 / 0
仏見 0 / 1	仏眼 0 / 1	仏後 0 / 1
仏骨 0 / 1	仏事 5 / 0	仏寺 2 / 5
仏生日 0 / 1	仏性 1 / 2	仏種 1 / 3
仏所 2 / 0	仏神 2 / 22	仏跡 1 / 0
仏説 0 / 2	仏前 3 / 1	仏陀 7 / 0

仏体 1 / 0 仏道 2 / 3 仏塔 1 / 0
 仏壇 1 / 3 仏敵 1 / 1 仏弟子 0 / 7
 仏天 1 / 0 仏殿 0 / 9 仏肉 1 / 0
 仏日 1 / 0 仏法 29 / 53 仏菩薩 1 / 1
 仏名 1 / 1 仏物 1 / 1 仏力 1 / 2
 一見して気付くことは、一方がゼロ・一方が一あるいは二という有無のばらつきと少数例が多いことである。
 一〇例以上ある語は『平家物語』の「仏法」と『太平記』の「仏閣」「仏神」「仏法」の三種類しかない。多数の語があるようでいてこれだけ使用頻度の低い語が多いことは、印象が散漫にばやけてしまうことを意味するであらう。

次に、一〇数例以上ある語をいくつか挙げてみる。

○『平家物語』

出家 52	念仏 42	罪 41	法師 39
三井寺 37	後世 36	僧都 36	法印 35
僧正 29	仏法 29	ほとけ 29	高野 25
菩薩 24	無慙 20	天台 20	菩提 19
悪行 19	阿弥陀 18	浄土 18	興福寺 17
後生 17	前世 15	戒 15	往生 14
尼 14			

○『太平記』

天王寺 69	東寺 61	仏法 53	三井寺 32
出家 38	ほとけ 22	仏神 22	仏閣 21
天龍寺 21	舍利弗 20	今生 19	悪行 18
沙門 17	僧正 17	冥土 17	仁和寺 16
興福寺 16	供養 16	修羅 15	釈尊 14
地獄 14			

この数字だけを眺めていても様々なことが推察できるのであるが、天王寺・東寺・三井寺・興福寺の数が多いのは、合戦の舞台となったり寺にまつわる説話章段が作品中に存在するからであり、僧正・僧都などは人名に関わって「寺の僧都」などの用例が多いからである。これらのことは直接的に作品の宗教性には連動してこない。『平家物語』に多い念仏・阿弥陀・浄土・往生が『太平記』の用例数が少ないため挙げがらず、『太平記』に修羅・地獄が挙げられているとか、また『平家物語』で挙がる後世・後生・前世のかわりに『太平記』では今生が挙がっているなど、取り上げてみたい相違点はいくつかある。が、本稿では、『平家物語』で最初に挙げられている「出家」52例が『太平記』でも38例あって比較検討に足る数値を示していることと、出家と関係する「尼」が

『平家物語』では14例みられるのに対して、『太平記』では挙がっていないことに注目してみることにしたい。

実は、本稿の副題は当初「仏教語使用の様相」を予定していた、二〇一六年度大谷大学国文学会での講演はこの副題でおこなった。しかし、索引から用例を洗い出す際、所謂専門用語としての宗教的思想的語義の用例のみならず、仏教に関わる緩やかな範囲で用例を拾った結果、先述の通り、専門用語の範囲の仏教語は異なり語としては大量にあるものの、一語一語のそれぞれの作品における使用頻度が低く、かつ有無のばらつきが非常に多く、現状での考察には向かないことが判明した。それに比べてより興味を引いたのが、仏教関連語とでもいうべき語群であり、そこで、考察の対象を「尼」と「出家」に絞ったのである。本稿ではその実態を表すために標記の副題に変更したことをここでことわっておく。

三

『太平記』において「尼」は二例、卷二十二「佐々木信胤官方に成る事」に二例とも見える。高師秋が菊亭（実尹か）に仕える女房「御妻」と深い仲になり、伊勢の守護となって伊勢に同道しようとしたところ、「御妻」

が乗ったと思っていた奥に、実際には「年の程八十許りなる古尼」が乗っており、「尼」を「瀬多の橋爪」に捨て置いたという。この説話的あるいは室町物語的な挿話での二例しか『太平記』には「尼」は使用されていない。これに対して『平家物語』では、「尼御前」「二位の尼」などの呼称や呼びかけの「尼ぜ」を除いて十四例みられる。

祇王廿一にて尼になり、嵯峨の奥なる山里に、柴の庵をひきむすび、念仏してこそゐたりけれ。

（卷一 祇王）

（祇王・祇女・とちの）親子三人念仏してゐたる処に、竹のあみ戸をほととうちたたたくもの出来たり。

其時尼どもきもをけし……

（卷一 祇王）

（仏御前が）かづきたるきぬをうちのけたるをみれば、あまになつてぞ出来る。

（卷一 祇王）

（祇王のことは）我等が尼になりしをこそ、世にためしなき事のやうに人もいひ、我身にも又思ひしか、

（卷一 祇王）

四人のあまども皆往生のそくはいをとげけるとぞ聞えし。

（卷一 祇王）

（俊寛の娘は）やがて十二の年尼になり、奈良の法

華寺に勤めすまして、父母の後世を訪ひ給ふぞ哀なる。

(卷三 僧都死去)

(清盛は) 小督殿をとらへつつ、尼になしてぞはなつたる。小督殿出家はもとよりの望なりけれ共、心ならず尼になされて、年廿三、こき墨染にやつれはてて、嵯峨のへんにぞすまれける。(卷六 小督)

『平家物語』の「尼」は右に引用したように、尼となつた後、実際に仏に仕える生活を送り、あるいは往生するといふ人々である。「祇王」は、後生四例・後世二例・出家一例・往生四例・念仏七例など仏教語が多数見られる女性出家往生譚である。また、卷三「僧都死去」も仏教思想の濃い章段である。そのような章段が存在するのが『平家物語』であり、女性出家往生譚が無いのが『太平記』であるともいえる。がさらに『平家物語』には、挿入説話ではなく物語の大きな構想に関わる「灌頂卷」が存在する。灌頂巻には「大原御幸」と「六道之沙汰」に計六例の「尼」が見られ、それらは阿波内侍・大納言佐・建礼門院を指す。建礼門院は壇浦合戦で入水したところを救出され、都に帰って後出家し大原に隠栖し安徳天皇と一門の菩提を弔う生活を送るのであるが、灌頂巻の存在は、そのような建礼門院と彼女に付き添い続

けた阿波内侍・大納言佐の往生を記すことで、平家の人々の救済を示唆する重要な役割を担う。⁽⁴⁾ここには大量の仏教語と仏教思想に基づく叙述がみられるのである。

『平家物語』が「尼」という語によって指し示す女性は、この物語の宗教性・仏教性を支える存在であるとも言える。『太平記』の「笑話」的エピソードでの「古尼」とは、全く異なる様相を呈している。

右のことは、事新しく言うまでもないことかもしれない。そもそも『平家物語』と『太平記』は、冒頭の序文において全く異なる思想基盤を明示しているからである。『平家物語』が「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり」沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす」と語り出した時点で、物語を貫く思想基盤は仏教であることが明言されている。それに対して『太平記』の序は次の通りである。

蒙、竊^{ひそか}に古今の変化を採つて、安危の来由を察るに、覆うて外無きは天の徳なり。明君之に体して国家を保つ。載せて棄つること無きは地の道なり。良臣之に則つて社稷を守る。若し夫れ其の徳缺くる則は位有りと雖も持たず。所謂、夏の桀は南巢に走り、殷の紂は牧野に敗らる。其の道違ふ則は、威有りと

雖も久しからず。曾て聴く、趙高は咸陽に刑せられ、
禄山は鳳翔に亡ぶ。是を以て前聖慎んで法を将来に
垂るることを得たり。後昆顧みて誠めを既往に取ら
ざらんや。

徹底的に中国的儒教的君臣論である。『太平記』の姿
勢はかくの如き君と臣のあり方を問うものである、との
ことであろう。とすれば、いかに仏教語・仏教関連語の
異なり語数が多くとも、『平家物語』のような宗教的思
想性は見出せない可能性が高い。しかし、用例を読んで
いくとそれだけでは済ませない可能性もある。「出家」
という語を手がかりに今少し考察を深めたい。

四

『平家物語』では、「三」で検討した女性が出家して
「尼」としての生活を遂げることと同様に、男性の出家
に関する話題が多く存在する。中でも維盛については卷
十「横笛」・「維盛出家」・「熊野参詣」・「維盛入水」の四
章段を使用して屋島脱出から出家・入水に至る物語が展
開し、滝口入道の出家遁世譚もそこに含まれている。ま
た、重衡に関しては、卷十「内裏女房」・「戒文」・「海道
下り」・「千手前」と卷十一「重衡被斬」に、南都焼討ち

の責任者として出家を許されず、鎌倉に護送され頼朝と
対面した後に木津で処刑されるまでの長期に亘る物語が
ある。いずれも「出家」の語を含め多量の仏教語・仏教
関連語が駆使される宗教性の強い章段である。これらの
章段での「出家」なる語についての検討は、章段の性格
が明白である以上、ここで紙数を費やす必要はあるまい
と考える。そこで、この二人以外の人物についての「出
家」の用例が、「出家」という「こと」をどのような姿
勢で扱うものであるのかを検討しておきたい。

まず、後白河法皇に関する用例である。

さるほどに、嘉応元年七月十六日、一院御出家あり。
御出家の後も万機の政をきこしめされしあひだ、院
内わく方なし。

(卷一 殿下乗合)

太政天皇の伊勢へ公卿の勅使をたてらるる事は、朱
雀・白河・鳥羽三代の蹤跡ありといへども、是みな
御出家以前なり。御出家以後の例は是はじめとぞ承
る。

(卷八 名虎)

(義仲が)院の御出家あれば法皇と申し、主上のい
まだ御元服もなき程は、御童形にてわたらせ給ふを
しらざりけるこそうたてけれ。(卷八 法住寺合戦)

出家の後も政治を執る、また、出家者が伊勢神宮に使

者を立てることにいささか首をかしげるニュアンスが含まれるようではあるが、批判のことばまでは出しておらず、これらは事実を記す叙述と判断してよいであろう。

清盛に関してはどうか。

年五十一にてやまひにをかされ、存命の為に忽に出

家入道す。

(巻一 禿髪)

(重盛が腹巻を着した清盛に)就中御出家の御身也。

……内には既に破壊無慙の罪をまねくのみならずや、

……

(巻二 教訓状)

出家入道の後も栄雄はつきせずつとぞみえし。出家の

人の准三后の宣旨を蒙る事は、法興院のおほ入道兼

家公の御例也。

(巻四 厳島御幸)

病になった際に平癒を祈願しての出家はままだること

であった。事実叙述であろう。藤原兼家以来の出家者の

准三后宣旨は稀な例として、出家後も栄耀尽きぬことが

おそらくはやや皮肉に述べられているのだろうが、表現

自体は抑制されている。重盛の発言は出家者のあるべき

姿を説くのであるから、清盛批判ではあっても「出家」

自体を云々するものではない。その重盛も病篤く死が近

づいた時点で出家している。

同七月廿八日、小松殿出家し給ぬ。法名は浄蓮とこ

そつき給へ。

(巻三 医師問答)

事実叙述というべき単純な使用には次のような人物紹介の場合もある。

信西が事にあひし時、二人ともに出家して、左衛門入道西光・右衛門入道西敬とて、是は出家の後も院の御倉あづかりにてぞありける。

(巻一 俊寛沙汰 鶴川軍)

(念願の三位に上り)やがて出家して、源三位入道とて、今年は七十五にぞなられける。

(巻四 鵄)

(文覚は)十九の歳道心をこし出家して、修行にいでんとしけるが、

(巻五 文覚荒行)

(覚明は)勸学院にありけるが、出家して最乗房信救とぞ名のりける。

(巻七 願書)

次の例は仏教的真理の例とでもいふべきものである。

出家の首のうへには自然五位の宝冠を現じ、光明蒼

天をてらして……

(巻十 高野御幸)

次いで、病平癒・存命のための出家に繋がるものではあるが、今少し政治的意図あるいは軍記ならではの出家の例が相当数みられる。

望む官職が得られぬ場合、また罪されて流される場合にも出家することがあった。

徳大寺殿は一の大納言にて……家嫡にてましましてけるが（中納言の宗盛に官職を）超られ給けるこそ遺恨なれ。「さだめて御出家などやあらむずらむ」

……（巻一 鹿谷）

徳大寺の大納言実定卿は、平家の次男宗盛卿に大將をこえられて、……出家せんと給へば、……

（巻二 徳大寺之沙汰）

（関白基房は）鳥羽の辺ふる川といふ所にて御出家あり。……遠流の人の道にて出家しつるをば、約束の国へはつかはさぬ事である間、始は日向国へと定められたりしか共、御出家の間、備前国府の辺、井ばさまといふ所に留め奉る。（巻三 大臣流罪）

罪科に問われた際、あるいは合戦で敗れた折は命を助けんがための出家もあった。

（高倉宮以仁王の皇子を）さらばとうとう出家をせさせ奉れ（巻四 若宮出家）

（同じく以仁王の皇子が）奈良にも一所在ましけり。御めのと讃岐守重秀が御出家せさせ奉り、ぐしまいらせて北国へ落くだりたりしを、

（巻四 通乗之沙汰）

この宮は後に木曾義仲に戴かれ「木曾の宮」と呼ばれ巻

八で再び話題となる（二例）。

もう一人、鹿谷事件当事者である藤原成親の例をみよう。

（成親のことば）命だにいきて候はば、出家入道して高野粉河に閉籠り、一向後世菩提のつとめをいとなみ候はむ。（巻二 小教訓）

重盛へのこの明らかな命乞いにより成親は死罪になるべきところを流罪になだめられ、配所で出家する。その後の「出家」四例は事実叙述である。しかし結果として清盛の憎しみをかった彼は結局は配所で暗殺される。この鹿谷事件では娘婿を助けようと自らの出家を盾に交渉を試みる人物が現れる。娘婿成経を助けようとする教盛である。

今はただ身のいとまをたまはつて出家入道し、かた山里にこもり居て、一すぢに後世菩提のつとめをいとなみ候はん（巻二 少将乞請）

と詰め寄られて、清盛は「さればとて出家入道まではあまりにけしからず」と成経の処分を保留する。教盛は成経に「出家入道まで申たればにやらん、しばらく宿所にき奉れとの給ひけれども」と語る。結局は成経は康頼・俊寛とともに鬼界島に流罪になるが、教盛の「出家

入道する」との詰めよりは一旦の効果はあげたのであった。

同じ鹿谷事件の平康頼は、

康頼はながされける時、周防室づみにて出家してん
げれば、法名は性照とこそついたりけれ。出家はも
とよりの望なりければ、

つゐにかくそむきはてぬる世間をとく捨てざり
しことぞくやしき
(巻二 康頼祝言)

彼の場合、「大臣流罪」の例とは異なり、配流途中での
出家は配流地の変更をもたらす力はない。が、「出家は
もとよりの望み」という彼については、その後鬼界島で
の物語や帰洛後の『宝物集』著作まで含め物語は好意的
に記している。

「罪科に問われた際、あるいは合戦で敗れた折」でこ
れまで見たのは、以仁王の皇子を始め武士ではない人々
であった。軍記ならではの武士の例はどうか。

義経軍に破れた義仲の腹心樋口次郎兼光は、行家を討
とうとして紀伊国に向かった際、都での軍を知り、上る
途中義仲の死を知らされ郎等に次のように下知して自ら
は都に入り討死しようとする。

君に御心ざしおもひまいらせ給はん人々はこれより

いづちへもおち行、出家入道して乞食頭陀の行をも
たて、後世をとぶらひまいらせ給へ。

(巻九 樋口被討罰)

落武者は出家していれば殺されないという前提があつた
のだろう。そして樋口自身は児玉党の人々の、

勲功の賞に申かへて命ばかりたすけ奉らん。出家入
道をもして、後世をとぶらひまいらせ給へ

(巻九 樋口被討罰)

のことばに降人となる。しかし児玉党の意見は容れられ
ず、樋口は処刑される。

重盛の子供の一人宗実が平家滅亡後養子先を追いつ
れ俊乗房重源を頼る。

聖(重源)いとおしくおもひ奉て、(宗実を)出家せ
させ奉り、
(巻十二 六代被斬)

と、しばらくはかくまうが鎌倉に報告した結果、鎌倉下
向を命じられ、助からぬ事を覚った宗実は自ら食を断つ
て死ぬ。

武士の間でも出家することで命を助けるという了解事
項があつたらしいことがわかるが、その効力はあまりあ
るとはいえないようである。しかしこのような出家が非
難されているわけでもない。

『平家物語』においては文脈におけるニュアンスの違いはあるものの、淡々とした事実描写と考えられる例と「助命」あるいは「刑の軽減」目的での出家が記される例があり、後者の場合でも、直接に指弾されることはないのである。

五

さて『太平記』に見える「出家」の語数は三十八例である（御出家・出家・出家す）。ただし、索引には四十三項目が挙げられているが、その中の四項は章段名であるので実際の使用例からは除いた。また土井本では「出家」であるところが古活字本では「出塵」となっている一例があり、それも総数から除いた。その三十八例全用例について考えてみよう。

『太平記』には、『平家物語』の維盛・重衡・建礼門院のように複数章段に亘ってその出家・往生にまつわる話がつづられていく人物は見られない（重衡は出家を許されず処刑であるが）。一人の人物の出家に焦点が合わせられてもその分量はやや短めの一章段である。その一は、卷十「塩飽^{しほく}入道自害事」の嫡子忠頼で、新田義貞の鎌倉攻めによる鎌倉幕府滅亡の際、父親から

何くにも暫く身を隠し、出家遁世の身ともなり、我が後生をも訪ひ、心安く一身の生涯をもくらせかしと言われるものの拒否して先立って自害する。その拒否の根拠は「時の難を遁れんがために出塵（土井本 出家）の身と成て天下の人に指を差されん事、是に過たる恥辱や候べき」であった。

その二は、卷十三「藤房卿遁世事」である。万里小路藤房は、後醍醐天皇への度々の諫言がが容れられぬことを歎き致仕して「法体」となる。父宣房は藤房が向かった北山岩蔵へ行くが、既に藤房は行脚に出て行方不知であった。障子に書き残されていた古頌の一句に「出家端的報親難」とあった。かつて宣房が五部の大藏經を書写して春日社に納めた時、夢想に与えられた立て文に金字にて「速證無上大菩提」とあったのは、

子息藤房卿、出家得道し給べき、其善縁有りと示されける明神の御告げなるべし。誠に百年の栄耀は風前の塵、一念の発心は命後の灯也。一子出家すれば、七世の父母皆仏道を成すと、如来の所説明かなれば……

と、智ある人が感歎したという。

その三は、卷三十七「尾張左衛門佐遁世事」で、これ

はごく短い章段である。足利義詮が斯波氏頼を執事に任命しようとしたが、当腹の三男を寵愛していた父高経はこれを阻止した。

左衛門佐是を聞て父をや恨みにけん、世をうしとや思ひけん、潜に出家していづちともなく迷出にけり。付随ふ郎従共二百七十人、同時に皆髻を切て、思々にぞ失にける。此人、誠に父の所存をも破らず、我身の得道をも願て出家遁世しぬる事、類少き発心なり。……(当時の風潮の批判)……遂に道心さむる事なくしてはて給ぬるこそ有難けれ。

その四は卷三十九「光嚴院禪定法皇行脚事」に見えるエピソードで、章段全体ではないが、光嚴院の諸国行脚の際、紀伊川にかかるあやうい柴橋で光嚴院を手荒く押落した武士達の内二人が、しばらくして高野山に「只今出家したる者と覺くて、濃き墨染にしほれたる桑門二人御前に畏て」前非を謝し随行を願ったというものである。彼らの懇願に対し院は「出家は誠に因縁不思議なれ共、随順せん事はゆめゆめ叶ふまじき」と謝絶する。右に挙げた八例の「出家」は、その一の忠頼の場合は、敗戦に際して出家して命を全うせよと言う父のことにばに対し、それを「恥辱」と把握している。『平家物語』で

は表に出していない反応である。二・三・四はいずれも藤房・氏頼・桑門二人に対し評価し肯定的に章段は記されている。氏頼の出家が道心さめることなく貫かれたことを称賛する際に、当時の状況を歎く文言が記されていることは、他の用例を考える際に有用かもしれない。

『太平記』にも、特に批評の文言を加えず事実叙述としか言えない例がいくつかある(十例)。

(尹大納言師賢卿は)出家の志有る由頼りに申されけるを、相模入道子細候はじと許されければ、……桑門人と成り給ひしが、幾程なく元弘の乱出来し始め、俄に病に侵され円寂し給ひけるとかや。

(卷四 笠置囚人死罪流刑事付藤房卿事)
左兵衛督直義卿出家して、隱遁の体に成り給ひしかば、將軍の嫡男宰相中将義詮、同十月二十三日鎌倉より上洛有て、天下の政道を執行ひ給ふ。

(卷二十八 義詮朝臣御政務事)
此の宮をば去年御繼母宣光門の女院の御計ひとして妙法院の門跡へ御入室あるべしとて、すでに御出家あらんとし給ひけるを……御出家の儀を止られて日野右大弁時光に預け置参せられける。

(卷三十二 英宮御位事)

本院は、去ぬる観応三年八月八日、河内の行宮にして御出家あり。御年四十一、法名勝光智とぞ申しける。

(卷三十三 三上皇吉野より御出事)

去程に、平氏の一族皆出家して召人になりし後は、武家被官の者共、悉く所領を召し上げられ宿所を追出て僅なる身一をだに措きかねて……

(卷十一 金剛山寄手被誅事付佐介貞俊事)

竹園撰家の外に未だ准后の宣旨を下されたる例なし。平相国清盛入道出家の後准后の宣旨を蒙りたりしは、皇后の父たるのみに非ず、安徳天皇の外祖たり。又忠盛が子とは名付ながら、正く白河院の御子なりしかば、華族も栄達も今の例には引がたし。(卷三十

吉野殿と相公羽林と御和睦事付住吉の松折る事)

また、『太平記』が好んで挿入する説話には仏典説話などに見える天竺や震旦の話もある。

(舍利弗との術比べに負けた) 六師外道が徒、一時に皆出家して正法宗に帰伏す。

(卷二十四 山門の嗽訴に依て公卿僉議事)

(道士との術比べに勝った摩騰に感じ) 三千七百餘人即時に出家して、

(卷二十四 山門の嗽訴に依て公卿僉議事)

さらば我も沙門と成て食に飽ばやと思ひければ、仏の御前に詣でて、出家の志ある由を申すに、仏、其志を随喜し給ひて、

(卷三十五 北野通夜物語事付青砥左衛門事)

仏典関係のこれらの説話が挿入される意義は問題とすべきであるが、「出家」の語に関しては特に問題とすべきところはなからう。

さて、これまでの八例と十例の計十八例に続き、これから取り上げる諸例はいささか問題含みのものである。

まず、卷三十四「吉野御廟神璽事付諸国軍勢京都に還る事」の例である。観心寺にある南朝の人々が敵の来襲に浮き足立つなかで、「上北面」の男が山林に逃れようと思ひ、まず「先帝の御廟へ参り出家の暇をも申さんと」参つたところ、後醍醐天皇をはじめ俊基・資朝らが仇敵退治の相談をするのを見てあわてて戻る。結局義詮は観心寺には攻め寄せず、上北面の夢が思い合わせられるというのだが、この上北面の男が出家を果たしたのか否かについては全く記されない。⁽⁶⁾無関心なのである。

卷二十五「持明院殿即位事付仙洞妖怪事」は崇光天皇即位の大嘗会をひかえて準備が始められるという時に、院の御所に子供の頭を噛えた犬が現れ西に向かつて吠え

た後かき消すように失せる、という怪異がおこる。触穢をおそれ大嘗会を中止すべきか否かの勘状を求められ「前の大判事明清」が出した結論は、「神道は王道の用る所に依るといへり。然らば只宜しく叡慮に在るべし」であつた。これに対して「神祇大副卜部宿禰兼豊」は、法令通りで触穢に及ばぬなら神道は無いも同然、清濁汚穢を忌み慎むのが神道の重視するところではないのかと怒つて、

而るを触穢の儀無く大礼の神事無為に行はれば、一流の神書を火に入れて、出家遁世の身と罷成べしと憚ることなく申し述べたという。神祇官の存在意義を放擲するのかという怒りであろうか。それを聞いた若殿上人らは、無事に大嘗会が行われたならば「兼豊が髻は不便の事哉、とぞ笑れける」という。「出家遁世」を盾にとつての抗議が笑いの対象となっており、事柄のレベルの差はあるが、『平家物語』の教盛の詰めよりが一旦の功を奏したのとは相違している。

卷十五「賀茂神主改補事」は、基久の、娘を天皇になるべき宮に嫁がせようとの画策が裏目に出て、即位した後醍醐天皇の治世の始めに「さしたる咎」なく勅勘を蒙り賀茂社の神職は貞久に移った。その後も世の転変ごと

に改補が繰り返され、基久は、

夢幻の世の習、今に始めぬ事とは云ながら殊更身の上
に知られたる世の哀に、よしや今は兎ても角でも
と思ければ、「うたたねの夢よりも尚化^{あた}なるは此比
見つる現なりけり」と、基久一首の歌を書留めて、
遂に出家遁世の身とぞなりにける

という話である。乱世ゆえの転変であるが、『太平記』はその出発点を基久の娘の結婚に関する画策と見る。なまじな欲を抱いたためというのであろう。類例の例が今一つ見られる。九州では、菊池に追われ小武・大友らの室町將軍方が南朝方に吸収されそうになり、義詮は探題を下して何とか収拾を図ろうとし、斯波氏経を探題とした。氏経は僅か二百四五十しか兵を集められず、そのまま九州に向かうが、舟に傾城を多数乗せていたのを遁世者に中国の李広の故事を引いて非難される。

果して幾程無く高崎の城にも泳えず、浅猿き体にて上洛し給ひしが、面目なくや思はれけん。尼崎にて出家して諸国流浪の世捨人と成りにけり。(卷三十八

九州探題下向事付李將軍陣中に女を禁ずる事)

基久の例とは逆に無策あるいは無能であつたために出家に追い込まれる例である。恐らく基久にも氏経にも仏法

修行の爲の出家の意図はなかつたであらう。

これらの例、上北面の男の出家が果たされたかどうか
が記されないままになったこと、兼豊の出家遁世を盾と
しての抗議が笑いの対象となったこと、基久と氏経のタ
イプは異なるがしくじつての余儀ない出家という四例を
見てくると、『太平記』の出家の特徴がやや明らかにな
つてきたように思われる。

ここで、次の一群の出家に移ろう。

尊氏が後醍醐天皇方になったことで鎌倉幕府六波羅探
題は近江国番場に滅亡する。光厳天皇・後伏見上皇・花
園上皇も官軍方の手に落ちる。光厳天皇の寵臣日野資名
は、いかなる憂き目を見ることになるかと先を危ぶむ。

（資名は）其刃の辻堂に遊行の聖の有ける処へおは
して、出家すべき由を宣ひければ聖聽て戒師と成て、
是非無く髪を剃落さんとしけるを、資名卿聖に向て、
「出家の時、何とやらん四句の偈を唱る事の有り
げに候者を」と仰せられければ、此聖其文をや知ら
ざりけん、「如是畜生発菩提心」とぞ唱たりける。
三河守友俊も同く此にて出家せんとして、既に髪を洗
けるが、是を聞て、「命の惜さに出家すればとて、
汝は是畜生也と唱給ふ事の悲しさよ」と、ゑつぽに

入てぞ笑はれける。此の如く今まで付纏ひ進らせた
る卿相雲客も、此彼に落留て出家遁世して退散しけ
る間、今は主上・春宮・両上皇の御方様としては経
頭・有光卿二人より外は供奉仕る人もなし。

（卷九 主上・上皇五宮の爲に囚へられ給ふ事

付資名卿出家事）

集中的に出家という語が五回繰返される印象深い部分で
あるが、「命の惜さに出家」することは、「流転三界中
恩愛不能断 棄恩入無為 眞実報恩者」も知らない遊行
の聖（時衆）に「如是畜生」といわれても自嘲の笑いを
する以外なかつたのであらう。『太平記』の出家の用例
の最初に掲げた忠頼の「是に過たる恥辱なし」と相呼応
するであらう。

將軍は、矢矧の合戦の事を聞召し候しより、建長寺
へ御入り候てすでに御出家候はんとい仰せ候しを、
面々やうやう申留めて置参せて候。……將軍たとひ
御出家あつて法体に成せ給候とも勅勘通るまじきや
うをだに聞召し候はば、思召直すことなどかなくて
候べき。……（偽りの繪旨を読ませる）……これ御覽
候へ。かやうに候上はとて遁れぬ一家の勅勘にて
候へば、御出家の儀を思召し翻へされて氏族の陸沈

を御助け候へかし。

(卷十四 矢矧・鷲坂・手越河原闘事)

新田義貞と尊氏の戦いである。矢矧での合戦に敗れ、建長寺に籠もって出家するという尊氏を思いとどまらせようと、上杉重能が、隠遁の身たりとも刑罰は緩めず、探し出して誅殺すべしとの内容の偽りの論旨を作り、尊氏に見せたところ出家の志を翻し、義貞への反撃に出るという場面である。結局は、家と自分の身が助からん為の出家の志であったということになろう。

(正成の計略に陥り半数に減った京の尊氏勢は、正成勢に急襲され) 敵寄すべしとは夢にも知ぬ事なれば、
俄に周章ふためきて、或は丹波路を指て引くもあり、
或は山崎を志て逃るもあり、心も発らぬ、出家して
禅律の僧に成るもあり。

(卷十五 将軍都落事付薬師丸帰京事)

斯波氏経の例を思い起させるが、「命の惜しさに出家」するのでもある。忠頼のいう「天下の人に指を差されん事」であろう。

(義貞側の武士で降参した者は大名家に一人ずつ召人の体にて預けられたが) 十餘日を経て後菊池肥後守は警護の宥くありける隙を得て本国へ逃下りぬ。又宇都

宮は、放し召人の如くにて逃ぬべき隙も多かりけれ共、出家の体にて徒に向居たりけるを悪しと思ふ者や為たりけん、門の扉に山雀を絵書き、其下に一首の歌をぞ書たりける。

(卷十七 還幸供奉人々禁殺せらるる事)

逃出すことを可能にしてあるにも拘わらず、命助からんと「出家の体」になって気が緩んでいるのを憎み嘲るのである。

(義貞討死の後、他に異なる近習であった斎藤季基・道猷が落ちたこと) 是を始として、或は心も発らぬ出家して往生院長崎の道場に入り、或は縁に属し罪を謝して黒丸の城へ降参す。

(卷二十 義助重ねて敗軍を集る事)

義貞が討死したことで軍勢が離散してしまうことをいう。命助からんとての「心にも発らぬ」出家がここでも批判の対象となつていよう。

最後は高師直・師泰である。

師直去年の振舞をば(直義が)尚もにくしと思召ぬ事有るべからず。げにも頭を延て参る位ならば、出家をして参るか、……師直は四国へや落ると評定有けるを、薬師寺次郎左衛門公義、「など加様に力無

き事をば仰せ候ぞ。……縦御出家候て、何なる持戒持律の僧と成せ給て候共、三条殿の御意も安まり上杉・畠山の一族達、憤りを散候べしとは覚え候はず。……只御方の勢の未だすかぬ前に、混討死と思召し定めて、一度敵に懸りて御覧候はんより外は、餘義あるべし共覚え候はず」と言を残さで申しけれ共、執事兄弟只矇々としたる許にて、降参出家の儀に落伏しければ、公義、泪をはらはらと流して「……運尽きぬる人の有様程浅猿き者は無りけり。……」

(巻二十九 師直師泰出家事付薬師寺通世事)

命は能く棄難き物也けり。執事兄弟、かくても若命や助かると、心も発らぬ出家して、師直入道道常・師泰入道道勝とて、裳なし衣に提鞢きんぎょさげて、降人に成て出ければ、見人毎に爪弾きして、出家の功德莫太なれば、後生の罪は免る共、今生の命は助難しと、欺ぬ人は無りけり。

(巻二十九 師冬自害事付諏方五郎事)

「命助からん」為の「心も発らぬ出家」が如何に憎まれているか、嘲笑されていたかがよくわかる。「出家の功德莫太なれば」までが白々しく思われる程である。

このような使用の様相を見ていると、文中の「出家」

という語すべてが「心も発らぬ」という形容句つきに感じられるようになる。巻九・十四・十五・二十・二十九と散在しているにしても十五例の「出家」が「命や助かると心も発らぬ出家」の文脈のなかに登場する影響は大きいといふべきであろう。これが、『太平記』の特徴である⁽⁸⁾。宗教性・仏教的どころか「語」自体のニュアンスに、あるいは揶揄・嘲笑・不快の感覚がつきまといかないのである。

『平家物語』の場合は、維盛・重衡・建礼門院に関わる章段群や祇王のような章段の存在が、事実叙述も含めて出家や尼の語に深い宗教性や仏教性があると享受させるように構想されているといえよう。『太平記』では「心も発らぬ」出家群の存在が『平家物語』とは逆方向に作品の印象を引き寄せるのである。

『太平記』と『平家物語』の文学的印象の相違をもたらすのは、このような仏教関連語の使用の様相の差異に、その原因の一端を求めることができるのかもしれない。

(1) これまでの拙稿で明らかにし得たことは、『平家物語』では仏教語を含むべき「悪行」が、『太平記』では必ずしもそうではないこと、形容詞の語義については、『平家物語』の方がやや広く、古代からの語義を残していること等である。ただし「あさまし」については『太平記』の語義の広がりが非常に大きく、かつ新しい領域を開いている点が注目に値する。

(2) 『平家物語』・『太平記』の索引はそれぞれ編者も作成時期も異なるため、索引制作の方針自体がかなり異なっている。本稿ではそのことを考慮の上で語数については筆者の調整をすませたうえで、記した。行った調整については、可能な限り本文中に記した。

(3) 「祇王」は龍谷大学蔵覚一本には採用されていない。しかしそのことが龍大本の仏教性の希薄さにつながると云うことは全くないので、「祇王」を有する覚一本の方が覚一本本来のあり方だということにもならないだろう。

(4) 拙稿「女院に課せられしもの——灌頂巻六道譚考——」(『軍記と室町物語』清文堂 二〇〇一年)

(5) 拙稿「心弱き人の往生——維盛入水——」・「悪人往生——重衡——」(前掲書)

(6) 本文は

御方の官軍かやうに利を失ひ城を落さるる体を見て、
「敵のさのみ近付かぬ先に妻子共をも京の方へ送遣し、我が身も今は髻切つて、いかなる山林にも世を逃ればや」と思ひて

であるので、吉野の御廟に出かけた時点では未だ出家していないと思われる。

(7) ここまでの『太平記』の例で気付くことに、「出家遁世」が多いことがある。「世捨人」もみられる。『平家物語』では「後生菩提のつとめ」や「後世をとぶらふ」が散見されることと比較して、このようなところも相違点として指摘できる。

(8) もちろん、わざわざ「命助からん」・「心も発らぬ」出家というところには、「本来あるべき出家」の意識があることは当然である。藤房・氏頼などの例がそれを示している。しかし「非難すべき出家」をわざわざ「ことば」として書くのが『太平記』なのである。

*本稿は、二〇一六年度大谷大学国文学会において『平家物語』と『太平記』のことは——仏教語使用の様相——と題して行った講演に訂正・補筆したものである。(本学特別任用教授)